8組　自立活動の実践

１．単元名　　にこにこ新聞を作ろう

２．単元の目標

〇地域に関する活動に取り組むことで郷土に対する愛着を深めるとともに、自分に対する自信をつける。（心理的な安定）

〇新聞作りの取組を通して関わる相手と親しくなる。（人間関係の形成）

〇言葉を豊かにするとともに多様な手段で自分の考えや思いを伝えることができる。

（コミュニケーション）

３．学習活動について

（１）　児童について

在籍は２年男児１名で、両耳人工内耳装用をしている。静かな環境であれば、通常の音声は聞こえ、自然な会話をすることができる。しかし、不意な話しかけや早口、口ごもった言い方になると聞き取りにくくなる。また、広い空間や騒々しい場所での話は聞き取りにくく、補聴援助システム（ロジャー）を使っている。

交流学級では、生活科、体育、音楽、図工、道徳、学級活動を合同で学習している。算数は自学級で学習することが多く、国語は単元のねらいに応じて学習の場を変えている。本児は、友達と一緒に体を動かして遊んだり、絵を描いたりすることが好きである。学習はまじめに取り組み、積極的に発言することも多い。また、自然豊かな地域に住んでいて、生き物さがしを楽しんだり、畑作業を手伝ったりすることも多い。そのためか、生き物や草花、野菜などについてもよく知っている。さらに、読書が好きで語彙も豊かである。

今年度は、本児の表現力を伸ばそうと、本児が活動したことを新聞としてまとめる「にこにこ新聞」作りに取り組んでいる。１学期は、豆腐作りを中心に、よもぎ団子作りや遠足、学級園の観察などの記事を載せた「にこにこ新聞１号」を作成した。完成までに３か月近くかかったのだが、完成のイメージや作成の見通しをもつ力があるため、やる気をもって取り組んでいた。記事を書く際は、自分で言葉を選んで伝わりやすい文章にしようする姿も見られた。一方、記事を書く時間が長くなると、億劫がる様子も見られた。長期的な取組になる新聞作りでは、本児の制作意欲を喚起しながら、効率的に記事を書く方法を用いる必要があると感じた。

（２）　単元について

自立活動は「個々の児童又は生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基礎を培う。」ことを目標とし、６区分２７項目の内容がある。本学級では、自立活動を「にこにこタイム」と称し、週あたり３時間の学習を行っている。本児が、自立した社会生活をするためには、難聴である事実を肯定的に受け入れ、自分に自信をもって生活できるように支援することが重要である。そのため本単元「にこにこ新聞を作ろう」では、「心理的な安定、人間関係の形成、コミュニケーション」を主なねらいとして、本児が住んでいる温泉地区に関連した取組を行ったことを新聞にまとめる活動をする。新聞作りのための取材や体験活動を通して本児の感性を高め、語彙を豊かにするとともにその表現力を伸ばしたいと思う。そして、「にこにこ新聞」を交流学級で発表したり、コラボノートで交流をしている県内の難聴学級児童に発信したりして感想などを寄せてもらうことで新聞を作った達成感や喜びを味わうこともできる。さらに、相手に「自分でもやってみたいな。」「自分の地域ではどんな活動があるのだろう。」などという思いをもたせる情報発信も期待できる。

そのようにして本児が地域や交流学級と関わり合いながら豊かな体験を重ねることが本児の自己肯定感、自己有用感を培うことにつながっていくと思う。

９月からとりかかっている「にこにこ新聞」は第２号になる。主な記事は、温泉地区にあるこんにゃく加工場の見学と学校で行うこんにゃく作りである。加工場の見学では、こんにゃくがいもから作られていることの驚きや地域の方が温泉地区の活性化を願ってこんにゃく作りに取り組んでいる思いに触れさせたい。また、こんにゃく作りでは、こんにゃくを練る感触やこんにゃくいもがこんにゃくに変化していく不思議さを感じさせたい。ほかにも温泉地区で川遊びをしたことや家の周りの気に入った風景も載せるつもりである。このように自分の住んでいる地域や人々に親しみ、地域のことを新聞で発信することで地域に対する愛情や自分への自信を培うことができると考える。

（３） 指導にあたって

〇研究の視点（１）

学ぶことに興味や関心をもち、課題解決への見通しをもって学習に取り組めば、自分の思いや考えをもち、主体的に学習に関わろうとする子が育つであろう。

【①教材・学習課題との出会いの場の工夫】

１学期の「にこにこ新聞１号」は、温泉地区の豆腐作りを取材したことや学校で豆腐を作ったことを主な記事にした。その他に、よもぎだんご作りや全校遠足などの記事を載せ、交流学級や交流のある松江ろう学校の先生に見てもらった。そして、「楽しそうなことをしているね。」「上手に書いてあるね。」「味のある詩を作ったね。」などの感想を寄せてもらい、本児は満足そうであった。その時のことを思い起こしながら、今回も１学期の継続として「にこにこ新聞２号」に取り組む。「にこにこ新聞２号」では、温泉地区で作っているこんにゃくを中心に扱い、その活動を記事にする。本児は、自宅近くの加工場でこんにゃくを作っていることは知っているが、こんにゃくがいもからできていることやその作り方までは知らない。そこで、加工場を見学し、こんにゃくの材料や作り方について教えてもらうことでこんにゃくについて興味をもたせたい。また、畑に行ってこんにゃくいもを掘り、そのいもを使って自分でこんにゃくを作ることにする。本児にとっては初めての体験であり、驚きや喜びも大きいものになると思われる。その思いが大きいほど、相手に伝えたいという気持ちも大きくなり、新聞の制作意欲につながっていくものと考える。

【②ねらいや学習課題、学習の流れの明確化】

本学級の自立活動「にこにこタイム」では、主活動（新聞作り）のほかに歌や詩を取り入れたモジュール的な学習過程を組んでいる。歌や詩は、発音の明瞭化や語彙の拡充をねらいにしている。そのような学習過程が本児にとってはリズムのある見通しのもちやすい時間になっている。

「にこにこ新聞２号」については、２学期に取り組んでみたい活動を相談し、記事に載せるものを決める。そして、新聞作りのめあてやレイアウトを考えてから制作に取り掛かる（資料②参照）。相談したことは、教室に掲示し、新聞作りの取組の進行状況を知らせることで活動に対する見通しがもてるようにするとともに制作意欲の継続を図りたい。

【③まとめや自己評価・相互評価による振り返りの場の設定】

新聞作りでは、毎時どの記事を書くか決めてから取りかかることにする。振り返りでは、その記事についてうまく表せた所を確かめるようにする。また、新聞を読む人の様子を想像したり、作成の進行状況を確かめたりしながら制作意欲を維持させていきたい。

完成した新聞は、印刷して交流学級で発表する。また、コラボノートを通して交流している県

内の難聴学級には、こんにゃく作りのことや川遊びのことをその都度コラボノートで紹介したり、完成した新聞をアップしたりして情報発信をする。そして、友達から感想をもらうことで取組に対する達成感や満足感を充足させていきたい。

○研究の視点（２） 　子ども自身の思考や表現に結びつくような学習の場（学習プロセス）を工夫すれば、お互いの思いや考えを共有し合い、さらに深めていこうとする子が育つであろう。

【①個人思考を深める手立てや位置づけの工夫】

　記事を書く活動では、「作文名人シート」（資料③参照）を使う。これによって、リードの部分（わかりやすいきじ）とコメントを寄せる部分（ぼくじゃないと書けない文）のかき分け方がわかりやすくなる。リードの部分を書く時は、「いつ、どこで、だれが、何をした」という基本的な文型を押さえる。写真にコメントを載せるときは、その活動をしている動画を視聴することによって、その時のつぶやきや思いが表出されやすくなると考える。そして、本児の言葉をメモに書き留めることで、本児らしい味わいのあるコメントができるものと思われる。さらに、「五感カード」を用いて評価をすることによって、本児が日常的に五感を使った表現を意識する姿を期待している。

五感カード

○研究の視点（３） 　情報活用の視点を明確にし、学習の中で児童がＩＣＴを活用する場を設定すれば、課題解決に向けて思考・判断し、表現する力が育つであろう。

【②発表場面で、根拠資料としてのタブレット端末の利用】

　本単元では、主にコラボノートを使用する。コラボノートで予め「にこにこ新聞」のレイアウト（資料④参照）を作っておくので、本児は記事を入力したり、挿入する絵や写真を選んだりするだけで新聞が完成する。記事の入力は、キーボードを使ったり、手書き入力での変換ができたりする。手書きの文字を使うこともできるので、本児が入力しやすい方法を選択できる。また、記事の位置や大きさなどを変えるのも容易なので、見やすい新聞になるよう変更を加えることもできる。このように新聞作りにコラボノートを用いることで、効率的に見栄えのよい作品ができる。

　完成した「にこにこ新聞」は、交流学級で発表する。プロジェクターで記事を提示し、言葉を加えることで人前での表現する力をつけていきたい。さらに新聞をプリントアウトして掲示し、コメントをもらうようにする。そのコメントによって、本児が「書いてよかった、次回作も作ってみよう」などと思う気持ちをもたせたい。また、コラボノートは web 上にアップできるので、現在コラボノートを通じて交流を図っている県内の難聴学級に「にこにこ新聞」を公開することで、他の児童が各々の学級で学習を広める契機になることも期待できる。

４．本単元で身につけたい情報活用能力

・自分が取り組んだ活動の写真や絵に添える記事について自分らしい言葉を使って表現する。
　Ｂイ）エ）カ）ク）

５．キャリア教育の視点

・身近な「人、もの、こと」に関心をもつ。（課題対応能力）

６．指導計画と評価計画（全１６時間・本時１０／１６時、◎は主活動の評価規準）

次	時	主な学習活動		心理	人間	コミ	主な評価規準（評価方法）
Ⅰ出会う	1	1．今月の歌 2．ことばのアルバム	3.にこにこ新聞 ・新聞に載せる記事を決める。		◎	○	＜今月の歌＞ ・CDの音に合わせ、きれいな声で歌えるよう意識しながら歌おうとしている。（行動観察） ＜にこにこ新聞＞ ・２学期に取り組む活動を想起して、進んで記事を決めようとしている。（発言）
	2		・新聞のレイアウトを考え、発表の方法を相談する。	◎		○	＜ことばのアルバム＞ ・言葉の意味や詩の情景を考えながら音読をする。（行動観察） ＜にこにこ新聞＞ ・1学期の取組を参考にしながら自分が発表するイメージをもつ（行動観察）
Ⅱ追究する	３～１３（本時１０時）		・新聞の記事を作る。 ・レイアウトを確かめ、見やすい新聞にする。	○	○	◎	＜にこにこ新聞＞ ・コラボノートを使って、文章を工夫しながら記事をつくる。（発言、作品） ・計画を見ながら、見通しをもって新聞作りに取り組む。（発言） ・相手を意識して、見やすい新聞にしようとする。（行動観察）
Ⅲ表現する・生かす	１４・１５	・交流学級で発表する ・コラボノートに完成した新聞をアップする。			◎	○	・声の大きさや調子に気をつけて、わかりやすく発表する。（行動観察） ・作品をネットに公開することに関心を示す。（行動観察）
	１６	・新聞作りの振り返りをする。		◎	○		・寄せられた感想を読み、取組の様子を思い起こしながら、「にこにこ新聞」を発表したことに満足感をもつ。（行動観察・ワークシート）

７．本時の学習

（１）目標

○言葉を豊かにするとともに、自分らしい表現を使って新聞記事を書くことができる。

（２）展開

	学習活動と予想される児童の反応	教師の支援（○）評価（【　】）ICT 活用
つかむ 考える 深める 振り返る	1．きれいな歌い方を意識して、口形（姿勢、発声）に気をつけて歌を歌う。 「歌は友だち」	○きれいな歌い方の中で、口形を意識するよう、鏡を見て口の開け方を確かめる。 口形を意識しやすくするため、プロジェクターで歌っている様子を映す。
	2．詩の意味を考えて音読をする。 「でんぽうごっこ」	○詩の内容をイメージできるように実物を示し、電報の説明をする。 パワーポイントを使って詩の構成や意図をつかみやすくする。
	3．「にこにこ新聞」を作る。 （1）記事の書き方を確かめる。 （2）こんにゃく作りの動画を見て、その時のつぶやきや気持ちを思い起こす。	○読みやすい記事を作れるように「作文名人シート（ようすをくわしく）」を示し、五感を使った表現を心がけるよう促す。 こんにゃく作りの様子を思い起こしやすくするためにタブレットで撮った写真や動画を場面ごとに示す。
	メモの言葉を使って記事（写真にコメントを書く）を作ろ	
	（3）記事（コメント）を考えて入力する。	○動画に記録してあるつぶやきや思い起こしている時の会話の中から本児らしい表現をメモする。 ○コメントを考えやすいように、予め写真を選定しておく。 読みやすい紙面になるようタブレット（コラボノート）で新聞記事を作る。 ○キーボードの使い方や予測変換について教え、入力しやすいようにする。
	4．本時の学習を振り返る。 ・プリントアウトした新聞を見て、よく表現できた文やこれから取り組むことについて話す。	○五感を使って書いている文があったら、「五感カード」を示し、よく考えて記事を書いたことをほめる。 【コミュニケーション】メモを意識して記事を書くことができる。（作品）
	メモの言葉を使ってコメントを書くと自分らしい記事ができる、	
		○レイアウトを見せ、新聞作りの経過状況を示すことで次時の制作意欲につなげる。

（3）　評価

評価の観点	十分満足と思われる児童の姿	おおむね満足と思われる児童の姿	支援が必要と思われる児童への手立て
コミュニケーション	・メモを参考にして、ほぼ自分だけで記事を書く。	・メモに示された自分の思いや気づきを記事に表す。	・文例を口頭で示しながら記事が書けるようにする。

（４） 研究の視点

・地域に関する活動をコラボノートで新聞としてまとめたことは、どのような効果があったか。

できあがった「にこにこ新聞２号」

８．指導の実際と考察

（１）「これ、だれが作ったんだろう」～研究の視点（１）主体的に学習に関わろうとする姿～

できあがった「にこにこ新聞２号」を見て、本児は、「これ、だれが作ったんだろう（本物みたい）」と感慨深そうにつぶやいた。そして、次の新聞（３号）作りに意欲的に取りかかった。このように新聞作りに対して主体的に関わろうとする姿が見られたのは、次の要因が考えられる。

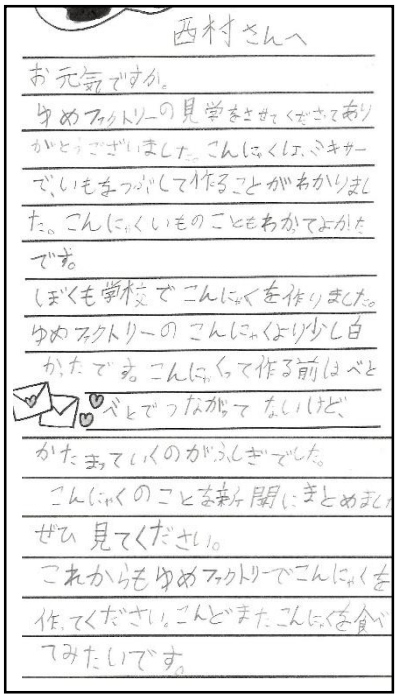
① 人との関わり

今回の「にこにこ新聞２号」のトップ記事は「こんにゃく」だった。こんにゃくは、地元で本児の祖母とその友人が「夢ファクトリー」という加工場で作っている。本児は、その加工場に行って、作業体験や聞き取りをした。加工場見学でこんにゃくの作り方や作るようになったいきさつを丁寧に教えてもらったので、記事にしたい内容が増えた。また、学校でのこんにゃく作りも

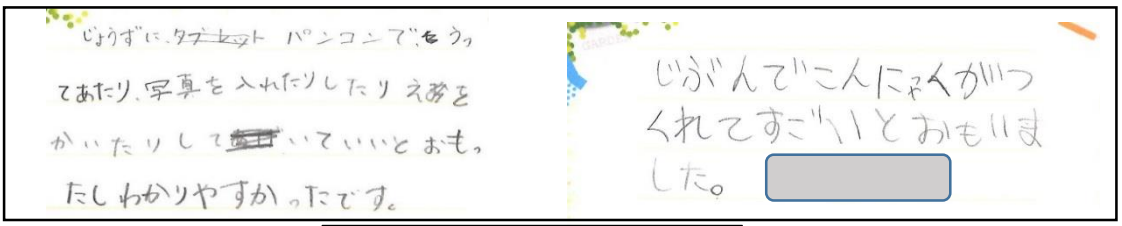
成功し、意欲的に新聞記事を書くことができた。できた新聞は、手紙を添えて二人に持って行った。そして、二人から「いい新聞を作ったね。また、こんにゃくを食べにおいで。」と直接返事をもらったことをうれしそうに学校で教えてくれた。本児が暮らしている地域で魅力ある教材、人材に巡り合えたことが新聞作りの推進力になったと言える。

また、新聞は交流学級でプロジェクターを使って発表した。友達からこんにゃく作りの質問を受けたり、感想を聞いたりして、本児ははにかみながらも嬉しそうだった。そして、教室前に新聞を掲示し、他学級からコメントをもらった。本児は、コメントを入れるポストを毎日開けるのを楽しみにしていた。さらに、９月から始めたコラボノートによる他校の難聴学級児童との交流ページにも新聞をアップした。画面上のやりとりだが、新聞の感想もあり、ページが更新されるのを楽しみにしていた。

このように新聞を通してたくさんの人と関われることが活動の励みになっていた。


西村さんへ
お元気ですか。
ゆめファクトリーの見学をさせてくださってありがとうございました。こんにゃくはスキーで、いもをつぶして作ることがわかりました。こんにゃくいものこともわかってよかったです。
しぼくも学校でこんにゃくを作りました。ゆめファクトリーのこんにゃくより少し白かったです。こんにゃくって作る前はべとべとでつながってないけど、かたまっていくのがふしぎでした。
こんにゃくのことを新聞にまとめました。ぜひ見てください。
これからもゆめファクトリーでこんにゃくを作ってください。ごんどまたこんにゃくを食べてみたいです。

お礼の手紙


じょうずに、~~タブレット~~ パソコンで、をうってあたり、写真を入れたりしたり えをかいたりして~~[illegible]~~いていいとおもったしわかりやすかったです。

じぶんでこんにゃくがつくれてすごいとおもいました。

ポストに入れられたコメント

② 具体的なめあて

今月の歌の指導では、「歌う時『スィ』は、舌を下の歯につけて歌おう」と発音について具体的なポイントを示し、本児は「スィ」の発音を意識して歌っていた。

詩「でんぽうごっこ」の指導では、電報について具体物を使って説明した後、「詩に出てくる暗号みたいな言葉の意味は分かるかな？」と問いかけた。そして、スクリーンで詩の構成が分かるようなスライドを順に提示した。本児は、なぞ解きをしているような気持ちで詩の構成を理解していった。

新聞作りでは「メモの言葉を使って記事を作ろう」というめあてを提示した。本児は、メモに示された言葉をつなげて記事を書けば良いわけで、文章を考えるのに分かりやすいめあてだった。

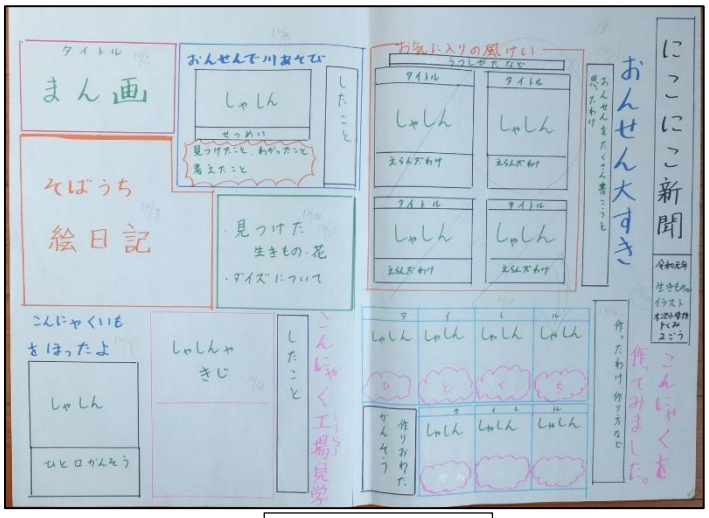
このように各活動ごとに具体的なめあてやポイントを示したので、本児はどのように取り組めばよいかすぐ理解でき、意欲をもって活動することができたと思われる。

鏡を使った構音指導

③　一貫した活動と見通し

新聞作りは、「活動の計画を立てる→活動する→ 新聞を作る→発表する」という流れで、ほぼ３か月周期で発行する計画で取り組んでいる。記事作りの際は「今月の歌、詩・ことば、新聞作り」という流れで毎時学習している。繰り返し行っている方法で、本児には、この流れが定着しており、どう学習するのかが理解しやすくなっている。

また、新聞作りでは、記事にする活動やレイアウトを予め作っているので、今日はどの部分に取り組むか、後どれくらいで完成しそうかという見通しがもちやすくなり、制作意欲を持続することにつながっている。



レイアウト図

（２）「べとべとみたいなつるつるみたいな」～研究の視点（２）思いや考えを深める表現～

こんにゃくを作る時、素手でいもを練ったのだが、本児には抵抗感があり、「手が嫌がっているう。」と言って、なかなか取りかかろうとしなかった。本時では、その時の様子や思いを次のような記事として表した。

> ねる前は少し気もちわるかったけど、ねることができました。ねったあと、ちょっとだけさわってみました。べとべとみたいなつるつるしたかんじでかたかったです。
> （※下線部はメモに起こした言葉）

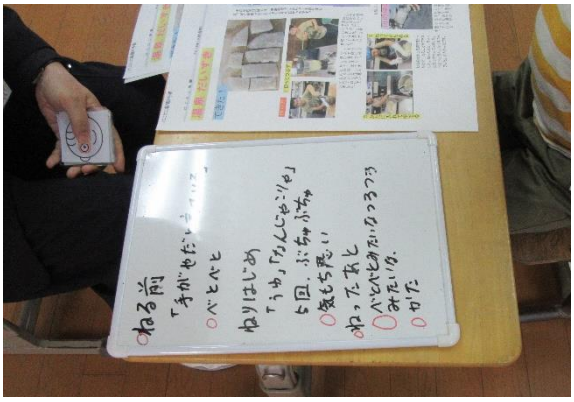
こんにゃくの様子や取りかかった時の気持ちがよく表れた文章である。このような表現ができたのは、次の要因が考えられる。

①動画による情景の想起

こんにゃくを作る時、本児は、興味半分、こわさ半分といった表情で「わあ、べとべと。ぶちゅぶちゅしてる。」などとつぶやきながら取りかかっていた。その様子をタブレットに録画しておき、本時はそれを再生して記事を書いた。再生することによって、本児が忘れかけていたつぶやきや表情を確認することができた。また、その時のエピソードを語ることで情景や思いを想起でき、記事作りに取りかかりやくすなった。

②本児らしい表現につながるメモや五感カード

タブレット端末に録音された本児の言葉や、視聴しながら出てきた本児のつぶやきをメモに起こした。そして、五感を使った自分らしい味わいのある表現をするよう促した。本児は、そのメモを取捨選択して記事に取り込み、五感を使った表現にするよう留意して文章を考えていた。そして、できた記事を見て、五感カードを貼りながら味わいのあるポイントを確かめた。



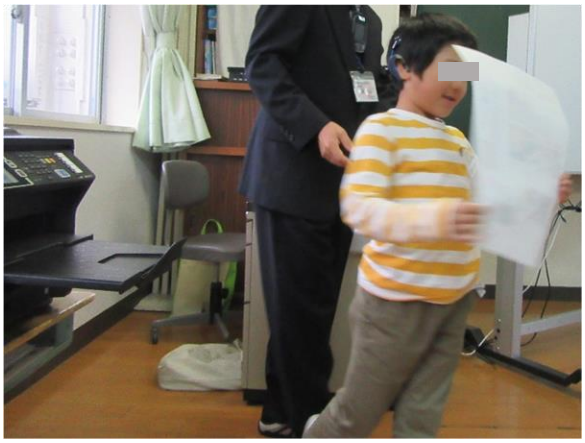
五感カードを用いた確かめ

（３）「こっち（コラボノート）が楽」～研究の視点（３）ＩＣＴ活用の効果～

本単元とは別に国語で絵をつなげて物語を作る学習をした。本児にその物語の書き方を「手書き、録音（ロイロノート）、文字入力（コラボノート）のうち、どうやって書こうか？」と投げかけたら「こっち（コラボノート）がいい。」と答えた。その理由を聞いたら「手書きは直すのが面倒で、字が苦手だから。録音は、長い文を考えないといけなくて、結局書くことになりそうだから。」と答えた。いろいろな入力方法を体験しているので、それぞれのよさをよく分かっていた。

①キーボード入力の慣れ

本児は１年時よりタブレット端末のひらがな５０音入力を体験している。初めは手書きよりかな入力が速かったが、手書きに慣れるにしたがって、手書きの方が速くなった。しかし、丁寧な仕上がりを求めるとかな入力が有効だということに気づいたので、現在は、学習内容によって表現手段を使い分けている。また、新聞作りにおいては、同じ言葉を繰り返し入力することがあるので、キーボードの予測変換の機能や利用の仕方を教えた。入力を繰り返すうち文節で言葉を区切ることを意識し出し、予測変換の機能を次第に使いこなすようになった。国語の物語作りで「こっちが楽。」と言ったのも、キーボードの予測変換の便利さを実感していたからだと考えられる。

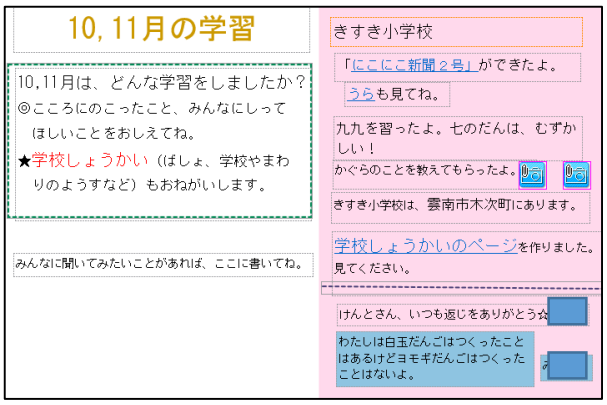


プリントアウトされた新聞

②コラボノートの手軽さ

初めの取組「にこにこ新聞１号」に取りかかる際、本児と新聞の内容や記事の量、大きさなどについて話し合った。新聞の見本をいくつか提示すると、本児は、「新聞って、こうやって（両手を広げて）見るし、漫画など（小コーナー）もあるもの。これ（示した見本）は新聞じゃない。」と言い、一般の新聞紙のようなイメージをもって新聞を作りたい気持ちがうかがえた。そこで、「にこにこ新聞１号」では、そのイメージを大事にしてレイアウトを考えた。

コラボノートは、画像の大きさや配置、文字数に合わせたレイアウト変更などが手軽にできる。本児は、写真を選び、記事を入力するだけでイメージに近い新聞ができる手軽さを喜んでいた。また、教室にプリンターがあるので、タブレット端末で入力した後すぐプリントアウトできる。本児は、プリントアウトされた本時の新聞と前時の新聞を見比べ、次第に仕上がっていく新聞をうれしそうに見ていた。



コラボノートの一部

出来上がった新聞は、プリントアウトして掲示したり、関係者に配布したりした。また、プロジェクターで投影して交流学級で発表したり、Web 上にアップして難聴学級間の交流を図ったりした。データがあるので、このように手軽に多方面に紹介できるよさも本児の達成感を高めていた。

（４）成果と今後の課題

成果としては、繰り返し取り組むことによる効果を認めることができる。今年度は、新聞作りに関する取組を４回行った。回数を重ねるごとに活動の見通しがもちやすくなり、作成意欲も持続した。また、タブレット端末の扱いや文字入力もかなり慣れてきた。ゴールのイメージがもて、できた新聞を介して人とのつながりが広がるこの活動は、本児の達成感や満足感を高めた。また、活動の様子を録画・再生したり、手軽に新聞を作ったりすることができるＩＣＴ活用も学習の質を高めることにつながったと考えられる。

課題としては、次のことが挙げられる。

○新聞の記事数が多くなったり、長文の記事になったりすると、入力するのを億劫に感じることがある。

○活動後、間をおいて記事を書くと新鮮味が薄れ、平板な記事になりやすくなる。

○指示や手順が細か過ぎると、自分らしい文章表現ができにくくなる。

○キーボード入力に不慣れだと、記事を書くストレスが大きくなる。

本単元では、活動後、できるだけ間をおかず記事作りに取りかかり、短時間で自分らしい記事を書けるようにして課題を払拭したつもりである。しかし、記事を減らしてより短時間で発行できる新聞にしたり、入力に取りかかるまでの時間を次第に短縮したりするなどして、ねらいや方法を柔軟に変更する手立ても必要だったと考える。また、タブレット端末を使った文字入力は、５０音ひらがな入力をしているが、これからの社会生活を見越して、音声入力やフリック入力などの方法も試みたい。さらに、構音指導や語彙の拡充についてもタブレット端末をはじめ、ＩＣＴ機器活用の余地が考えられる。

今後も本児が、自分らしく生き生きとした取組ができるよう、ＩＣＴ機器の効果的な活用を含めた実践について、研鑽を重ねていきたい。

プロジェクターを使って交流学級で新聞発表